発熱する街

会員
鈴　木　いずみ

なぜ、都会の雑踏に引きつけられるのだろう。街なかでモチーフを探して描くことを12～13年続けている。街は、人と同じだ。朝になると目覚め、時間とともにエネルギッシュになり熱を発散する。そして新陳代謝を繰り返す。常に変化し続けることで存在を持続されている。同じ場所が季節や曜日や時間帯によって別の顔になる。鼓動し、呼吸し、健康な血液を循環させる。

その街に異変がおきた。突然に拡がった新型コロナウィルス感染症によるパンデミック。雑踏が消えた。「不要不急の外出を避けて」「集まらないで」というアナウンスが繰り返される。緊急事態の度に街はどこもガラガラになり、シャッターが降りる。緊急事態が解除されても二度と上がらないシャッターもあった。血栓が詰まって組織が壊死するように。

失いかけて初めて、その価値を思い知らされるものがある。人があふれた平和な街の風景、気配、たくさんの人の笑い声、電車の音、交差点を渡る顔の重なり。発熱する街が描きたくて、展覧会で上京すると、スケッチブックを持ってよく渋谷駅前スクランブルに出かけた。ニュースによく出るあの場所だ。週末が多かったので、そこは色とりどりのビーズをぶちまけたようだった。色だけではなく多くの熱と音が降り注いでいた。若いエネルギーが凝縮したあの場所で、押し流されずに立っているだけでも体力を消耗した。私は見渡した限り最高齢のようだったし、どう見ても異質だった。パンデミックの影もなかったあの頃でさえ、もっと歳取って筋力や抵抗力が低下したらここにはいられないと思ったものである。なのに私をそこに導いたものは何だろう。行く度に体の細胞の一つ一つがシャキッと目を覚ますような独特な魅力がそこにはあった。

時代は変わる。コロナ禍は都会の風景を、人々の習慣を変えた。しかし人間の本質はそれほど変えられるものではない。「生命がけで遊ぶ」とまでは言わないけれど、好奇心と行動力と遊びごころを持ち続け、生命ある限り描き続けたいと思っている。